# 書評・紹介

## 鈴木継美著『生態学的健康観』

篠原出版，1982年6月，242＋viiiページ

本書のタイトル「生態学的健康観」はまことに魅力的である．それは健康論についての生態学的という非常にユニークな発想法にもとづいているからである．健康の問題は，今日では単に医学や公衆衛生にたずさわる人々だけの問題ではない．極めて社会的な問題である．単に個人というミクロの問題だけではない．それはマクロ的な問題でもある．著者の生態学的発想もこのような意識によるものであるかもしれない．著者の学際的な研究態度と創造的な洞察力の中で生れてきた「生態学的健康観」を十分に理解することはようではない．

生態学の分野に門外漢である筆者にとって，本書を批評する「書評」は到底筆者の任ではない．ここでは，人口の研究にたずさわる1人の学徒としての立場から本書について若干の所感をのべることにしたい．

第1は，本書が生態学的人口論序説といった特徴をもっていることである．たとえば，第1章「人類生態学」の第3節「個体群生態学の水準」は人口変動をとりあげている．個体群生態学の主要なテーマの1つは，個体群サイズの変動，分布を規制する要因を探求することにあるが，これは人間社会での人口変動の研究である．人口変動は，人口集団のもっている生物学的自展力，土地の人口支持力，環境抵抗の3つの要因によって規制される，と著者はのべている．集団の生物学的自展力はいわば人口再生産力と移動性をふくんでおり，人口学の本来の基本課題でもある．さらに，第2章「人類生態学の課題」の第3節は「人口変動」ずばりとなっている．また，人口予測論が第13章の第3節においてとりあげられており，出生，死亡の人間行動の背景についての必要性が強調されている．

第2は，社会学に導入されたヒューマン・エコロジー（たとえば，A. H. Hawley, 1950）は，アメリカの大学の人口学教育の必須コースとなっていることである．著者の指摘している如く，いわゆる人類生態学の一部分ではあるが，人口学と生態学との極めて密接な関係を示しており，人口研究者の注目を要する点である．

第3は，本書の圧巻ともいうべき「生態学的健康観」のもっている意義である．日本人の寿命は今日世界一と呼ばれるほどの急速な長寿ぶりを達成した．それは死亡率のすばらしい改善の結果であることはたしかである．しかし，ここに2つの問題が提起されてきた．

1つは，この世界一の長寿は，世界一の健康を反映するものかどうか，もう1つはこれからの死亡率の改善は可能か，どうかという問題．中高年の「体力・運動能力」が著しい改善を示していること（文部省，昭和57年調査）が明らかにされたが，他方子供の骨折多発等が報告されている．また，不可避的な人口の高齢化によっては，老年人口の健康問題が重大な課題として表面化してきた．今世紀から来世紀にかけての国民的課題は，国民の健康にあるといっても過言ではない．第6章「健康と生態系」，第7章「健康指標論―生態学的健康観のために」，第8章「生態学的健康観について」と展開された著者の「生態学的健康観」論はこのような問題接近にあたって重要な示唆となるであろう．

第4は，本書の至る所でこれからの新しい課題を提起していることである．

第5は，著者の総合科学的視点である．人類生態学は人口学と共に本質的には学際的な科学である．本書の諸論文を通じての印象は，著者が人類生態学の立場から公衆衛生学を論ずるといいながらも，実は人類生態学を越えて（beyond human ecology），人間学ともいえる総合科学を志向しているように思われることである．人口学も究局において人間学でなければならないのかもしれない．

（内野　澄子）